

1900年前後明治学院普通学部教育事情の一考察

—訓令12号ショックを超えて—

岡 村 淑 美

はじめに

2019年度に明治学院高等学校（以下白金高校）新校舎建築が始まり、その引っ越し作業に伴う資料整理の中で、白金高校図書室や教務倉庫から明治期後半以後の資料が日の目を見ることとなった。その一つが、昭和初期に現像し作成されたと推測できるアルバムから見つけた写真である。

写真1は、左手から神学部校舎（現記念館）、井深梶之助邸、礼拝堂（ミラー館）、サンダム館、写真2は、サンダム館と宣教師館が建ち並んでいる。撮影日は不詳だが、礼拝堂が完成した1903年以降、また高層階から撮影されたと推測すると、ヘボン館からの撮影だと考えられ、1911



写真1



写真2

1900年代初頭のキャンパス写真、現物は裏焼きだったものを著者が画像修正

[明治学院高等学校所蔵]

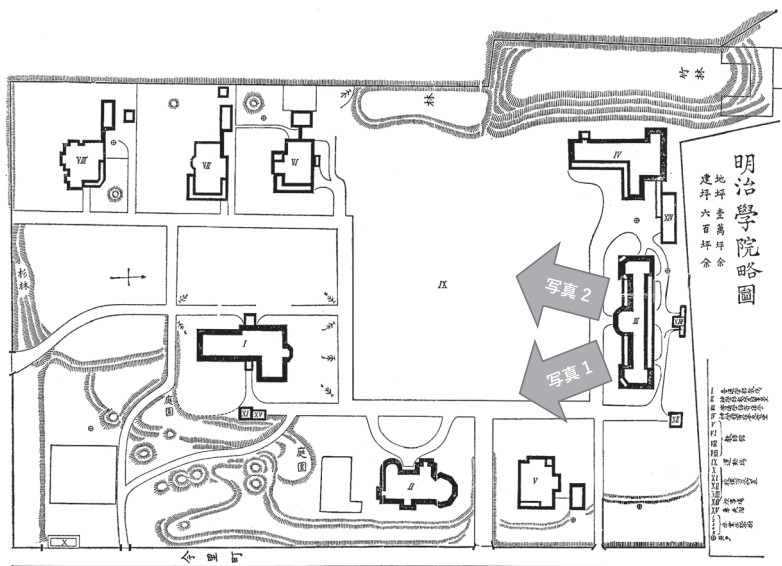


図 1

「明治学院普通学部設置願及び添付書類」1899年8月30日付より「明治学院構内図」明治学院百年史委員会『明治学院百年史資料集』第2集95頁より転載、
 I 普通学部校舎（サンダム館）、II 神学部校舎兼図書館（現記念館）、III 寄宿舍（ヘボン館）、IV 神学部宿舍（ハリス館）、V 宣教師館（インブリー館）、VI 宣教師館（ランデイス館）、VII 宣教師館（ライシャワー館）、VIII 宣教師館（バラ館）、
 矢印は、写真1および2の撮影方角、著者による加工

年ヘボン館焼失以前の間にしほられる。

では、1900年初頭の学院生活はどうだったのだろうか。白金移転直後の明治学院創設期（1887年以降）は、島崎藤村、馬場孤蝶、戸川秋骨ら普通学部第1回生たちによる旺盛な文筆活動による記録や、1910年代以降は同窓会報『白金学報』の刊行もあって、生徒学生の動静が垣間見られる。しかし、1900年前後にあたる明治30年代前半は、突出した卒業生の記事がいくつかある程度で、学院創立以来の最初の試練「訓令12号事件」にかき消され、当時の生徒・学生たちの姿が見えないのだ。

また『明治学院百五十年史』編纂事業に関わった際、白金高校に残されている学籍簿や成績簿の整理と留学生に関する学籍簿調査を行い、その時から感じていたことだが、学院史におけるこの時代の記述と、同窓会名簿などからわかる情報が一致しないという点もあった。例えば、訓令12号により、上級学校進学権や徴兵猶予の権利剥奪によって大量の退学者が出たと記述があるが、この時代は途中入学・退学が頻繁にあったことや、卒業者数が低迷していたのは確かでも、著しく退学者が増えた、という印象は、同窓会名簿からは得られなかった。

もう一つは、生方敏郎(1882-1969、普通学部1902年卒)の「明治学院の寄宿舎にも、少数の支那人と大勢の朝鮮人が来ていた。⁽¹⁾」という記述である。彼が在学中に在学していたと考えられる中国大陸・台湾、もしくは朝鮮半島系の人物は同窓会名簿では「李延喜」しかおらず、なぜ生方の目にこのように映ったのか。この2点について筆者はずっと疑問を抱き続けてきた。

白金高校には、1898年以降の成績一覧、大正期以降の学籍簿、また東山学院の学籍簿および成績簿が保管されている。これらの資料をひもといてみると、1900年前後は、明治学院にとって「訓令12号事件」以外でも、社会情勢等により大きな転換期を迎えていた。そこで本校に残されていた教務的資料を手がかりに、当時の学院教育事情について検証する。

具体的には、明治学院歴史資料館所蔵の『明治学院普通学部学籍簿(明治31年度入学生～明治40年度入学生)』および明治学院高等学校所蔵の『成績簿(明治31年度～明治36年度)』を基礎資料とし、作成したデータに基づいて当時の生徒の動向について明らかにする。なお、学籍簿と成績簿については、両者ともに誤記載や紛失したと思われる部分が多く、記載されている在学学生数等は学籍簿と成績簿では必ずしも一致しない。在学期間がごく短期間、もしくは試験欠席で成績簿への記載までいかな

かった例、逆に成績簿には記載があるが、学籍簿がどこかで欠損したのか、それとも仮入学的な位置づけだったのか何らかの理由で掲載がない例などもあった。一番多いのは名前と年号の誤字で、複数資料にあたって明らかに間違いの場合は、筆者が修正したデータを使用する。また同窓会名簿とも一致しない例も多くある。一つは「推薦会員」の存在で、卒業間近に特別な理由で退学した場合（徴兵や病による修学断念など）は、同窓会では「卒業」となっている。特殊な例は、明治学院第6代学院院长の都留仙次がある。学籍簿では、1903年1月に普通学部5年次に東山学院から転学しているが、成績簿では1902年度5年生の欄に彼の名前はなく、1903年度の高等部1年の欄から名前が見える。なお、同窓会名簿上では、1903年3月東山学院卒業と明治学院高等部と神学部と同窓生として名前がある。

このような状況であるため、学籍簿・成績簿どちらかに掲載があれば在籍したという確認でデータを収集し、同窓会名簿は漢字表記の確認など参考にする程度にとどめた。1898年度～1903年度の6年間に在籍が確認できた延べ人数602名の生徒のデータを基本として分析していく。また、明治学院史に関する年号や名称等の表記は、特別な断りがない限り『明治学院百五十年史』を底本とする。

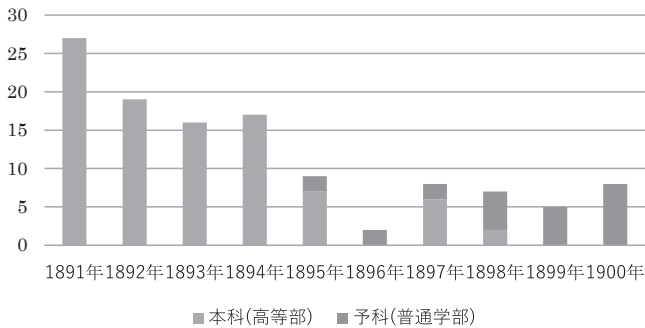
1. 訓令12号前後

1) 明治学院普通学部

まずは、明治学院普通学部について簡単に整理しておきたい。

東京一致神学校、東京一致英和学校および英和予備校を一体とした「明治学院」設立の際、前者は邦語神学部、後者は普通学部（東京一致英和学校は本科、英和予備校は予科）に引き継がれ「各種学校」となる。普通学部は、本科4年予科2年の6学年の課程とし、本科は「高等普通

1900年前後明治学院普通学部教育事情の一考察



グラフ1 普通学部卒業生推移
明治学院同窓会『会員名簿』1995年より作成

科」, 予科は「尋常中学校」と同等の教育を施すところと想定していた。⁽²⁾ 予科では英語の授業を重点的に行い, 予科本科通じて和漢文, 体操, 図画以外の授業は全て英語のテキストを使い, 英語で行われていたという。

第1回生に島崎藤村ら後の文壇の重鎮にもなる生徒たちが集い明治学院は開校したが, 他校が近代教育制度に基づいて整い発展していったことと, 欧化主義の衰退, 国粹主義の台頭により, キリスト教系学校の明治学院は生徒・学生減少に見舞われた。開校時には定員200名を満たしていたが, 5年後には半減している。

事態を打開すべく, 1894年1月, 尋常中学校の制度に合わせ, 従来の本科・予科を, 高等学部2年, 普通学部5年に改組。これに伴い学暦も変更がなされたようで, 開校以来9月入学だったものを, 4月入学に変更した。⁽³⁾ しかしながら同年6月, 「高等学校令」が公布され, 各種学校のままでは上級学校進学の手が閉ざされることとなり, 生徒数減少に拍車がかかってしまった。

1897年8月, アメリカ外遊中の井深梶之助宛ての書簡で, 熊野雄七

は次のように嘆いている。

入学申込ハ少シハ有之候得共依然尋常中学校ノ勢力ニ圧サレ格別増加之見込
ナシ 瘦我慢にハ多く之生徒ナキモ宜シト申候得共余り少数ニテハ張合ナ
シ⁽⁴⁾

こうした中、1898年1月「私立明治学院尋常中学部設置願」を東京府
に提出、最終的に4月26日に尋常中学校として認可され、5月1日か
ら新スタートを切ったのである。

2) 訓令12号事件

尋常中学校としての新スタートも、わずか1年後の1899年8月に文
部省訓令第12号が交付され、キリスト教主義学校は宗教教育の継続か
断念か、苦渋の選択を迫られることになる。明治学院は青山学院や同志
社とともに宗教教育を選択し、ようやく尋常中学校になったのを各種学
校に戻すことになった。なお、この時辛酸を嘗めたのは、キリスト教学
校だけでなく、仏教系の学校も同様であった。

事件の詳細は各学院史にゆずるが、この事件を時系列で明示⁽⁵⁾すると
ともに、成績簿から判明した生徒移動を列挙する。

1898年

※1学期の全校生徒数72名

6月16日 明治学院普通学部改め尋常中学校となる

7月 徴兵猶予の特典をうける

※2学期に9名の新入生を迎える

1899年

※4月 1年級17名、2年級11名、3年級10名、4年級8名、5年級23

1900年前後明治学院普通学部教育事情の一考察

名の合計69名の新入生を迎える（1学期の在校生数117名、前年度比45名増）

8月2日 私立学校令公布

8月3日 文部省訓令第12号発布

8月5日 尋常中学校の資格返納の手続きをとる

8月17日 明治学院臨時理事会にて中学部を改め普通学部とし且つ
高等学部英語師範科を設置することを可決

※2学期開始までにこの4月に入学した2年級11名中7名、3年級10
名中4名、4年級8名中3名、5年級23名中20名、合計34名が退学
（その他8名退学）し、全校生徒75名となる

9月5日 訓令実施を来年4月まで延期するよう陳情するも受け入れ
てもらえず

1900年

1月29日 明治学院に徴兵猶予の特典許可の願書を文部省に提出

※4月 41名の新入生を迎える（1学期の在校生数94名、前年度比23
名減）

5月6日 総ての専門学校入学規定に関して中学校卒業者と均一の
権利となる⁽⁶⁾

7月9日 普通学部、文部省の認定する中学校と同等なることが認
められ、徴兵猶予の特典が与えられる

1901年

※4月 77名の新入生を迎える（1学期の在校生数145名、前年度比
51名増）

1902年

※4月 75名の新入生を迎える（1学期の在校生数171名、前年度比
26名増）

1903年

※4月 58名の新入生を迎える(1学期の在校生数157名, 前年度比14名減)

5月18日 普通学部卒業生は各官立高等学校及び専門学校に入学試験を受ける資格を得る

生徒の異動について、各年度1学期時点の成績簿からわかる範囲で入学者と在校生数をあげたが、この流れだけでも、尋常中学校という看板と、徴兵猶予の特典が生徒募集にいかに影響があったのか一目瞭然である。1905年の井深宛て熊野雄七の書簡に、

一生徒概数 本年度入学者例年よりハ著しく増加を見たり 殊に五年級ハ数名の補欠に五十余名の受験者ありたり 依りて一々厳密に試験調査之上品行學術共に優等のもの十数名を撰抜して入学せしめ第二学期第三学期共に絶対的に入学を許可せぬ方針を取りたり

[傍注] 五年級入学試験にハ大分替玉来り之を看破して排除せり

又一年生も已に三十四名に達せり⁽⁷⁾ 依りて現在生徒概数は新入生高等科一年廿一, 二年一, 三年に計^マ二十二名, 普通科一年^マ廿四, 二年十, 三年八, 四年十, 五年十九計^マ七十八名合計^マ壹百名, 在籍生徒普通科一百九十名, 高等科三十七名, 計二百二十七名

右様の次第にて教室教具に不足を感じしも種々工夫の結果本年度は漸く間に合せ候 此形勢に進まは来年度ハ大に拡張の必要有之候⁽⁸⁾

とあり、数年前に青息吐息で送った書簡とは大違いだ。1904年以降普通学部だけでも、1904年137名、1905年81名、1906年252名、1907年328名、1908年342名となり、新入生の数は右肩上がりで増加した。⁽⁹⁾

このように近代化の波にのまれ上級学校進学権と徴兵猶予の特典に左右された時代に、明治学院をえらび青春時代を過ごした生徒たちは、何

を学びどのように社会に巣立っていったのか、次章以降で詳細に検証する。

なお本稿では、尋常中学校になる以前、1887年～1898年の普通学部は「旧普通学部」、訓令12号事件後の1899年以降は「普通学部」として区別する。

2. 普通学部教育事情

1) 学科課程

教育の要は言うまでもなく今も昔も教科教育となる。学校種は、「各種学校」、「尋常中学」、「各種学校」と変遷したが、学科（教育）課程はどうだったのか。

1872年（明治5年）、明治政府太政官が初めての教育法令「学制」を発し、日本最初の近代的学校制度確立への第一歩を踏み出す。男子の場合、学校種は大きく小学校、中学校、大学の三種に分けられた。

1886年4月10日に公布された「中学校令」は、中等教育制度を確立する第一歩となった。この時は、中学校卒業者は大学に入学することができる方針であったが、その後1894年高等学校令が公布により、高等中学校が高等学校となり、小学校・中学校・高等学校・大学の四段階構成となった。これにより尋常中学校の性格が明確化され、普通教育を施す学校の最終段階となる。⁽¹⁰⁾

では明治学院普通学部はどうであったのか、教育課程の変遷の観点から見ていきたい。「私立学院設置願」（1887年）によると、教育課程は表1の通りである。6年間通して「倫理」に相当な時間を割いていた。「倫理」は「之ヲ授クルニハ聖書ニ基キ其ノ真理ヲ講説」⁽¹¹⁾し、J.M.マコーレー、G.W.ノックス、G.H.F.フルベッキが担当した。また予科では多くの時間が英語に割かれているが、届出資料の「教科用図書表」を見ると、

表1 明治学院普通学部教科課程表(1887年)

	予備科1年		予備科2年		本科1年		本科2年		本科3年		本科4年	
倫理	道德	5	道德	5	道德	5	道德	5	道德	5	道德	5
和漢文	講読・作文	5	講読・作文	3	講読・作文	5						
英語	読方・訳解・文法・作文・書取・習字	①18、②③、20	読方・訳解・文法・作文・会話・書取	20	文法・作文・会話・翻訳・講演	①②、14、③11	修辭・作文・翻訳・講演	5	英文学・作文	5	英文学・作文	5
数学・星学	算術	5	算術	3	代数①②	5	幾何①②	5	代数①	5	三角法①	5
					幾何③	5	代数③	5	幾何②	5	星学②③	5
									三角法③	5		
地理	各国地理②③	2	各国地理	2			地文②	5				
動物・植物					動物①②	2						
					植物③	5						
物理・化学							物理③	5	物理②③	②5、③3	化学③	2
									化学①	5		
地質											地質①②	2
生理							生理及衛生①	5				
論理心理									論理	2	心理	3
史学							日本	5	各国古代	5	各国近代附文明	5
簿記									筆記①	1		
									復記②③	1		
理財											理財	2
唱歌			単音唱歌	3	復音唱歌	3	復音唱歌	3	復音唱歌	3	復音唱歌	2
図画	自在画法	1	自在画法	1	用器画法	1	用器画法	1	用器画法	1		
体操	普通体操	3	普通体操	3	兵式体操	3	兵式体操	3	兵式体操	3	兵式体操	3
週合計時間	39時間		40時間		36時間		32時間		34時間		32時間	

※①～③は学習する学期を表す。未記入の科目は1年通して学ぶ。

明治学院「私立学院設置願」に基づき作成

和漢文用と唱歌，教科用図書を用いない図画と体操以外はすべて洋書を用いており，教科指導のほとんどが英語で行われていた。

1886年第一次中学校令，1891年一部改訂を経て，中等教育機関が多く創られ，進学する生徒数も増えたが，中学校間で優秀な生徒の奪い合いの様相となる。明治学院もその当時の社会情勢や他の尋常中学校の台頭によって生徒数は減り，事態を打開するべく，各種学校ではなく正式な尋常中学校を目指すことになる。

1894年1月，明治学院は尋常中学校の制度に合わせ，従来の本科・予科を，高等学部2年，普通学部5年に改変し，1898年ようやく普通学部が尋常中学校に認可されることとなった。

1886年6月22日文部省令第14号における「尋常中学校ノ学科及其程度」の学科課程は表2である。

明治学院でも尋常中学校にする際にこの課程表に準じたと考えられる

表2 尋常中学校の学科目別週間教授時数（1886年）

教科	科目	1年	2年	3年	4年	5年
倫理	道德	1	1	1	1	1
国語・漢文	漢字交り文及漢文ノ講読書取作文	5	5	5	3	2
英語	読方・訳解・講読・書取・会話・文法・作文・翻訳	6	6	7	5	5
	第二外国語(若クハ農業)				4	3
歴史	日本及外国ノ歴史	1	1	2	1	2
地理	地文及政治地理	1	2	2	1	
数学	算術比例及利息算ノ代数ノ幾何ノ三角法	4	4	4	4	3
博物物理及化学	博物・植物・動物	1		2		3
	物理		1			3
	化学				2	
習字	習字	2	1			
図画	図画	2	2	2	2	1
体操	体操	3	3	3	5	5
	唱歌	2	2			
合計（時間）		28	28	28	28	28

文部省「学制百年史 資料編」（1981年，128頁）に基づき作成

が、その時の資料は残念ながら未発見である。足がかりになるのが、訓令12号事件をうけて提出した新「普通学部の設置願い」にある学科課程である（表3）。申請が急だったということもあり、尋常中学校申請時とはほぼ同じ内容を届け出たとみられている。

旧普通学部と比較すると、道德と英語の授業は格段に減り、国語・漢文については文部省の規定より多くの時間を割いた。そして、旧普通学部のときにはあった「唱歌」がなくなっている。この学科課程表は普通学部になっても引きつがれたが、1902年でまたも変更された。それが表4⁽¹²⁾である。

尋常中学校に準ずるために明治学院が一番に犠牲にしたのが、「倫理」もしくは「道德」の扱いで、この教科はどちらも前述の通り聖書を学ぶ時間であった。その次が、英語学習である。学院史や明治学院関連の文書を読むと、文部省とのやりとりは、なにかと目の敵にされるキリスト教が攻撃の矛先にならぬよう攻防する印象が強い。倫理と英語で大幅に

表3 明治学院普通学部教科課程表(1899年)

	1年	2年	3年	4年	5年	
倫理	口授又講義	1 口授又講義	1 口授又講義	1 口授又講義	1 口授又講義	1
国語漢文	講読(国文及漢字交り)	講読(国文及漢字交り)	講読(国文及漢字交り)	講読(国文・漢字)	講読(国文・漢字)	7
	書取(国文及書読文)	8 書取(国文及書読文)	7 書取(国文及書読文)	7 作文(漢字交り文)	7 作文(漢字交り文)	
	作文(国文及書読文)	作文(国文及書読文)	作文(国文及書読文)			
英語	音読	音読	音読	訳読	訳読	
	訳読	訳読	訳読	文法	作文	
	書取	6 書取	7 書取	7 作文	7 修辭	7
	会話	会話	会話	演説法	演説法	
	細字	作文	作文	和英翻訳	和英翻訳	
	習字	文法	文法			
歴史	日本歴史	1 日本歴史	3 東洋歴史	3 万国史	3 万国史	3
地理	日本地理	3 外国地理	3 外国地理	3 地文	3 地文	
数学	算術	4 算術	4 代数	4 代数	4 代数	
		代数	4 幾何	4 幾何	4 幾何	4
		幾何			三角	
博物物理 及化学	博物示教	1 鉱物	1 生理衛生	2 植物	動物	
		理化示教		物理	4 物理	4
				化学	化学	
習字	楷・行・草三体	1 楷・行・草三体	1 楷・行・草三体	1		
図画	自在画	1 自在画	1 自在画・用器画	1 自在画・用器画	1 (原本空白)	1
体操	普通兵式	3 普通兵式	3 普通兵式	3 普通兵式	3 普通兵式	3
合計	週28時間	週28時間	週29時間	週30時間	週30時間	

明治学院「私立学院設置願」に基づき作成

表4 明治学院普通学部教科課程表(1902年)

	1年	2年	3年	4年	5年	
修身	道德之要旨	3 道德之要旨	3 道德之要旨	3 道德之要旨	3 道德之要旨	3
国語・漢文	講読(国文及漢字交り)	講読(国文及漢字交り)	講読(国文及漢字交り)	講読(国文・漢字)	講読(国文・漢字)	6
	書取(国文及書読文)	6 書取(国文及書読文)	6 書取(国文及書読文)	6 作文(漢字交り文)	6 作文(漢字交り文)	
	作文(国文及書読文)	作文(国文及書読文)	作文(国文及書読文)			
英語	音読	音読	音読	訳読	訳読	
	訳読	訳読	訳読	文法	作文	
	書取	8 書取	10 書取	11 作文	9 修辭	8
	会話	会話	会話	演説法	演説法	
	細字	作文	作文	和英翻訳	和英翻訳	
	習字	文法	和文英訳			
歴史	日本歴史	2 日本歴史	2 東洋歴史	2 万国史	3 万国史・日本歴史	3
地理	日本地理	1 外国地理	1 外国地理・地文	2		
数学	算術	4 算術・代数	5 代数・幾何	6 代数・幾何	6 代数・幾何・三角	6
博物物理 及化学	鉱物	2 植物	1 生理衛生	2 動物	2	
				物理・化学	4 物理・化学	4
習字	楷書	2 行書	2 草書	1		
図画	自在画	1 自在画・用器画	1 自在画・用器画	1 自在画・用器画	1 (原本空白)	1
体操	普通兵式	3 普通兵式	3 普通兵式	3 普通兵式	3 普通兵式	3
					法制及経済	2
合計	週32時間	週34時間	週37時間	週37時間	週36時間	

『明治学院高等部・普通学部一覽』自明治35年至明治36年, 1902年, 22～25頁に基
づき作成

時間数を減らし、国語漢文の時間数を大きく増やしたのも、その影響によるものと思える。

しかし宗教教育を優先し再び各種学校に戻したせい、1902年には国語を文部省の規定並に減らす一方、倫理を修身に変更しつつも時間数を3時間に増やしている。旧普通学部時代には及ばないもののかかなりの時間増である。さらに英語も時間増となり、一度は無理して標準に合わせたが、結局は宗教教育と英語教育に重点を置く変更となった。なお、1902年度の1時間あたりの授業時間は40分間と、現在の白金高校の45分授業よりもさらに短い時間であった。

2) 生徒構成

表5は、1898年から1903年の、学級規模や生徒の年齢構成をまとめたものである。普通学部定員200名のところ、1898年は100人を切っているが、尋常中学校で認可された翌年には1.5倍に増え、途中激減する憂き目にもあったが、その後生徒数は順調に増えた。

この頃は学年ごとに1学級ずつの学年級で、1910年頃に1学年2学級に増え、昭和期には5クラス編成となる。

1学級あたりの人数は1年間の入退学で出入りが激しいためばらつきがあるが、概ね10人～30人程度的人数であった。

生徒は一級僅かに二十人たらず、当時の中学は五年制であったので一年級から五年級まで入れて百人たらずであったので一年生から五年生まで友人でそれはそれは親しいものであった。⁽¹³⁾【村井五郎(1884-?・1904年普通学部卒、旧姓真木)】

ひとしく生徒というものの、当時の学院生徒はよその生徒とその概念がすこしちがっていた。舎生、通学生の別なく、わたしたち少年にとって、学院での一日が自分のすべてであった。規則はあってもないも同然だったから、は

表5 年度別在籍者数および在籍者年齢構成

	1898年（明治31年）						1899年（明治32年）					
	1年	2年	3年	4年	5年	合計	1年	2年	3年	4年	5年	合計
在籍人数※1	18	18	15	20	9	80	24	31	27	18	33	133
学籍簿上の在籍者数※2	9	10	9	3	0	31	18	14	16	12	4	64
最年少年齢	11	14	15	17			11	12	14	15	16	
最長年齢	15	19	19	19			17	18	21	20	20	
平均年齢	12.7	16.0	17.3	18.0			13.4	14.9	17.0	17.9	18.8	
平均年齢・修業年齢※3	0.70	3.00	3.25	3.00			1.40	1.90	3.00	2.90	3.80	
	1900年（明治33年）						1901年（明治34年）					
	1年	2年	3年	4年	5年	合計	1年	2年	3年	4年	5年	合計
在籍人数※1	36	17	23	45	32	153	31	26	39	46	46	188
学籍簿上の在籍者数※2	30	15	21	36	32	134	25	26	31	45	39	166
最年少年齢	11	12	14	15	16		11	12	13	15	17	
最長年齢	17	18	22	22	22		18	19	20	23	23	
平均年齢	13.7	15.6	17.3	18.1	19.1		13.6	15.1	17.3	18.2	19.5	
平均年齢・修業年齢※3	1.70	2.60	3.30	3.10	4.10		1.60	2.10	3.32	3.20	4.50	
	1902年（明治35年）						1903年（明治36年）					
	1年	2年	3年	4年	5年	合計	1年	2年	3年	4年	5年	合計
在籍人数※1	33	40	43	44	38	198	33	45	41	48	26	193
学籍簿上の在籍者数※2	30	34	39	42	34	179	28	39	37	43	25	172
最年少年齢	12	12	13	14	16		12	13	14	14	15	
最長年齢	19	22	21	22	24		21	20	23	22	22	
平均年齢	13.6	15.5	17.3	18.6	19.4		14.0	15.1	17.2	18.5	19.1	
平均・修業年齢	1.60	2.50	3.30	3.60	4.40		2.00	2.10	3.20	3.50	4.10	

※1 該当年度に在籍したと、学籍簿または成績簿で確認できた人数。入退学月のズレがあるため、年間通しての在籍者数ではない。

※2 学籍簿上の人数。生年月日は学籍簿からしかわからないため、下欄の年齢関係は学籍簿のある生徒のみのデータとなる。

※3 修業年齢は1年次が12歳で、以降1歳ずつ上がり、5年次は17歳である。

たち以上の風来坊も自由にはいつてきたりしたが、はじめから明治学院でなければならぬとして、それも東京に家庭のあるわたしなぞはむしろ例外で、たいい全国から、学院に絶対の信頼をもって送られてくる少年たちばかりだった。人数もすくなく、わたしの記憶では、中学部五学年の各級がせいぜい二十人そこそこ。⁽¹⁴⁾【落合太郎（1886-1969・1905年普通学部卒）】

学年は違えども、二人ともほぼ同じような印象を受けていたことがわ

かる。

学校経営陣にとっては生徒数の低迷は頭の痛いことではあったが、生徒たちからすると少人数でアットホームな居心地の良い環境であったようだ。

次に生徒の年齢構成であるが、落合が「はたち以上の風来坊も自由にはいってきたりした」というように、下は11歳から上は24歳まで年齢差のある年齢構成であった。

表5の最年少年齢、最年長年齢、平均年齢の推移は、学籍簿の生年月日から割り出した在籍者の年齢である。どの学年級でも4歳差程度は当たり前で、同級生であるにも関わらず7、8歳差の学級も存在する。また学級ごとに在籍者の平均年齢と学制上の修業年齢を比較すると、低学年時では1歳程度の開きが高学年になるほど開き、平均3年程度遅れて5年生を修業していることがわかる。この傾向は、他の私立中学校でも同様で、武石典史によると明治30年の府立中と錦城中学の各学年の平均は、①府立一中 1年：14歳3ヶ月、2年：15歳11ヶ月、3年：16歳5ヶ月、4年：17歳5ヶ月、5年：18歳9ヶ月なのに対し、②錦城中学では、1年：13歳8ヶ月、2年：14歳6ヶ月、3年：16歳5ヶ月、4年：18歳0ヶ月、5年：19歳2ヶ月であった。⁽¹⁵⁾ 武石は他の公立・私立中も例に挙げながら、この府立と私立の差に、①当時の高等小学校2年修了程度では公立中学の入学が難しく、年少者は私立中学校に流れた、②第3学年以上の平均年齢が私立中学で高いのは、20歳前後の少年を一定数抱えており、彼らの多くが徴兵猶予・1年志願兵の資格狙いによる在学である、③特に高学年において年齢の幅が大きく、入学前の経歴が一樣ではなかった、の3点を挙げている。⁽¹⁶⁾

明治学院の場合はどうであったか。①の高等小学校2年修了程度の例は、学籍簿の記載が統一されておらず、正確ではないため統計としては出せなかったが、1年次に11歳で入学したのが入学者136名中9名も

いる。

満年齢で12歳以上の入学資格が規定にあるが、⁽¹⁷⁾ 近代の学校制度確立の過渡期でもあり、修業年齢自体がかなり曖昧だったようだ。鈴木限三(1884-1968・普通学部1903年卒)は、最初に高等小学校2年修了で愛知中学校へ入学したが、この中学校では実質同学年より2年も早く入学したことになる。2回落第し同年と同級になりいやになって、⁽¹⁸⁾ 兄の鈴木春が通っていた明治学院に1902年1月4年級に転学した。

年嵩の生徒については、徴兵猶予特典目当ても当然いた。訓令12号事件の前後の5年生大量入学・大量退学はその例に該当する。特典の恩恵にあずかれなかった時期は、「ただ上級の方に不定期に英語を修得するが爲め入學者」⁽¹⁹⁾が多かったようだ。その多くは他の中学校を卒業後に普通学部に入學した人々である。

アマチュアスポーツ愛好団体「天狗倶楽部」に所属し、鉦山技師として活躍した大村一蔵(1884-1944・普通学部1903年卒)も、中学校を卒業後に普通学部5年次に入學した一人である。彼は、鳥取中学校を1902年3月に18歳で卒業し、さらに英語を学ぶために明治学院で1年間過ごした。明治学院が高等学校への進学権がない時代の卒業生であるが、彼自身は鳥取中学校でその資格を得ていたので、第五高等学校に進学できた数少ない例である。⁽²⁰⁾

伊藤春吉(1881-1921、普通学部1904年卒)は、早稲田中学を卒業後に普通学部5年に転入、高等部に進んだ。植村正久が保証人という点、長じて牧師となり新潟、朝鮮半島、台湾⁽²¹⁾で伝道にあたった牧師でもあり、明治学院神学部に進むつもりで転校してきたとも考えられる例になる。(高等部進学後の学歴については不明。)

落第、目的変更に伴う転学、病氣療養による休学などで修業年齢と離れてしまった例も多い。井深梶之助の長男の井深文雄は2回も留年しているため卒業に7年かかった。

一度就職してから学校に進学する例もある。明治学院を卒業し、アメリカ留学後母校で教壇に立ち、その後実業界に転じ大丸取締役をつとめた富尾留吉（1879-1951・普通学部1901年卒）は、学籍簿の前歴は「家庭教育」とあるだけで、3年次入学の時点で就学年齢の14歳より遙かに年嵩の18歳であった。彼の手記『思い出の記』にその理由が記されている。富尾は1893年に高等小学校を卒業し、代用教員を務めたが、1894年には父の死もあって関西鉄道に入社する。15歳の時である。当時四日市の伝道に従事していた明治学院神学部卒業（1890年卒）の本川源之助牧師によって、富尾は洗礼を受けた。彼との接点がやがて明治学院への進学につながる。⁽²²⁾ 1898年の秋、富尾は関西鉄道を退社して上京、尋常中学校となったばかりの明治学院尋常中学部三年級への編入を許された。

当時、本社会計課勤務の小林良⁽²³⁾と云ふ同年輩位の青年と懇意になり、共に本川牧師の指導の下にあったが、兩人とも東京明治学院へ入学の事などを相語るよふになったのである。⁽²⁴⁾

小林良輔は一足先に明治学院普通学部3年次に入学し、富尾が上京するのを待った。富尾と同じく就職後に中学進学を選んだ彼も前学歴は「家庭教育」となっている。

なお、明治学院の場合は、神学部の子科生が聴講生として普通学部4年生に所属している例もあった。

3) 入学時期と試験

明治学院普通学部に入學するには、当然ながら入学試験があった。⁽²⁵⁾ 退学が頻繁にあったこの時代、学校経営的には1年生以外の学年でも新入生を受け入れる必要があり、入学月もバラバラであった。

表6は、学年毎の入学者数および、その年の全入学者に対する割合で

表6 入学年割合

	1年	2年	3年	4年	5年	合計
1898年	18人(25%)	13人(18%)	11人(15%)	19人(27%)	10人(14%)	71
1899年	26人(31%)	17人(20%)	11人(13%)	8人(9%)	23人(27%)	85
1900年	29人(33%)	7人(8%)	9人(10%)	22人(25%)	22人(25%)	89
1901年	25人(21%)	13人(11%)	27人(22%)	30人(25%)	26人(21%)	121
1902年	35人(31%)	12人(11%)	29人(26%)	20人(18%)	17人(15%)	113
1903年	32人(38%)	19人(22%)	17人(20%)	8人(10%)	8人(10%)	84
合計	165人(29%)	81人(14%)	104人(18%)	107(19%)	106人(19%)	
1903年※	全国	90%	4%	3%	1%	
	府立	87%	7%	4%	2%	0%
	私立	35%	16%	13%	17%	19%

※1903年全国・東京府立中学・東京私立中学の平均は、武石作成データを引用

ある。1年生の入学は3割程度しかなく、2、3年次では割合的にはやや低調であるが、4、5年にもなると再び増加しており、概ね東京にある他の私立中学校と同様で、全国や東京府立中学とは違った傾向であった。一つには、府立中学は基本的に1年次で多く受け入れ、学年を重ねる毎に落伍者を振り落としていた点、また私立中学校がそれら生徒の受け皿になっていた点が上げられる。転学はしばしば私立学校間同士でも行われた。チャンスがあればよい条件の学校に移ることは、この時代当たり前のことだった。また、東京にある私立中学校および明治学院のように中学校に準じた各種学校は、地方の青年たちの東京遊学の受け皿でもあり、特に明治学院には寄宿舎があったため、地方出身者を受け入れやすかった。学年が上がるにつれて地方出身者の数は多くなる。

表7によると、おおよそ6割は無試験入学である。前歴該当学年より

表7 入学試験実施状況

	1898年		1899年		1900年		1901年		1902年		1903年	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
無試験	9	53%	22	81%	46	67%	73	64%	71	70%	53	58%
有試験	5	29%	5	19%	22	32%	39	34%	26	25%	36	39%
その他・不明	3	18%	0	0%	1	1%	2	2%	5	5%	3	3%
合計	17		27		69		114		102		92	

学籍簿に試験有無の記録があったもののみ

下の学年，もしくは前歴の修学年の継続上にある場合は基本的に無試験⁽²⁶⁾，私塾の出身や何らかの理由で前歴の学年の遅れを挽回して上の学年を希望する場合は有試験であったようだ。また，富尾のように小学校修了後事実上自宅学習だった者は，該当学年を判断するために入学試験が課された。⁽²⁷⁾

4) 制服・制帽

この頃，生徒の学校生活にとっては一大変革があった。それは制帽・制服の制定である。1900年代に入ると，全国の中学校で相次いで制服・制帽化が進んだ。生方敏郎や大村一蔵⁽²⁸⁾は，明治学院入学前の学校で制服への移行を経験している。

明治学院の制服・制帽の制定は，「普通学部設置願い」（1899年）が初出となる。厳密には1898年なのか1899年なのか判断がつかないのだが，前述の通り，もし普通学部設置願いを整える時間的余裕がなく，尋常中学校のものと同じ前提に立つならば，1898年より明治学院は制服・制帽となったと考えられる。

この時代の卒業集合写真をみると，生徒の姿は一変する。

明治学院歴史資料館で保管されているこの普通学部時代の写真のう



写真3

1900（明治33）年3月25日撮影 集合写真〔明治学院歴史資料館蔵〕



写真4

1903（明治36）年3月卒業記念 普通部集合写真〔明治学院歴史資料館蔵〕

ち、1901年卒業生写真までは写真3と同様生徒は和服姿であったのに対し、1903年、04年の生徒たちは学生服姿となる。尋常中学校になった1898年から制服・制帽が適用されたと仮定するならば、卒業写真が学生服姿になるのが1903年で、時期は一致する。1902年の集合写真が現存していれば制服になった時期の特定がもっと厳密にできたと考えると、写真が未発見なのは悔やまれる。

これ以降、詰襟のいわゆる男子学生服が制服となり戦後も引き継がれたが、1953年に新制中学校が当時としてはモダンなブレザーの制服に変更となる。⁽²⁹⁾ えんじ色のネクタイについては、現在の明治学院中学校の制服にも受け継がれている。一方白金高校では、男子校から共学に移行した1991年、現行の制服に変更された。

5) 進級・退学状況

進級・退学状況をまとめたものが表8となる。

1898年は、どの学年も半数は次の学年に進級、または卒業ができていた。学年のほとんどが進級する現代と比べれば進級率の低さに驚くが、表にある期間では多い方だった。進級率が著しく低いのが1899年、訓令12号事件の年である。それでも尋常中学校になる前から在学の生

表8 進級退学状況

	1898年						1899年						1900年					
	在学者	及第	進級率	留級	退学	退学率	在学者	及第	進級率	留級	退学	退学率	在学者	及第	進級率	留級	退学	退学率
1年	18	12	67%	1	5	28%	24	9	38%	5	9	38%	36	13	36%	4	19	53%
2年	18	13	72%	2	3	17%	31	13	42%	3	15	48%	17	9	53%	0	8	47%
3年	15	8	53%	0	7	47%	27	14	52%	2	11	41%	24	14	58%	2	8	33%
4年	20	10	50%	1	9	45%	18	9	50%	2	7	39%	46	21	46%	3	22	48%
5年	9	7	78%	1	1	11%	33	6	18%	2	25	76%	32	12	38%	2	15	47%
合計	80	50	63%	5	25	31%	133	51	38%	14	67	50%	155	69	45%	11	72	46%

	1901年					1902年						
	在学者	及第	進級率	留級	退学率	在学者	及第	進級率	留級	退学率		
1年	31	13	42%	1	17	55%	33	21	64%	3	9	27%
2年	26	10	38%	1	15	58%	40	21	53%	4	15	38%
3年	39	18	46%	2	19	49%	43	22	51%	2	19	44%
4年	46	21	46%	4	21	46%	44	18	41%	5	21	48%
5年	46	25	54%	1	20	43%	38	23	61%	0	15	39%
合計	188	87	46%	9	92	49%	198	84	42%	14	79	40%

成績簿から作成

成績簿から作成

徒たちを含むためこの38%となっているが、5年次の18%は徴兵猶予特典に振り回された結果であり、尋常中学校の特典・資格がいかに学校経営を左右するのかわかる。

この混乱ぶりを村井五郎は回想に残している。

靖国神社の大祭の日などは休まないで、文部省から学院の卒業生は高等学校の入試を受ける資格が突如として剥奪された。当時は、今の大学の入試のはかりに高等学校の入試を受けて高等学校に入校すれば自然に大学に行かれるのであった。私は高等学校入学の希望であったので、五年生の第二学期の時であったが、早中に知った者が居たので、無理に早中の五年級に転入した。であるから卒業は一九〇三年であるのが一九〇四年になったのである。⁽³⁰⁾

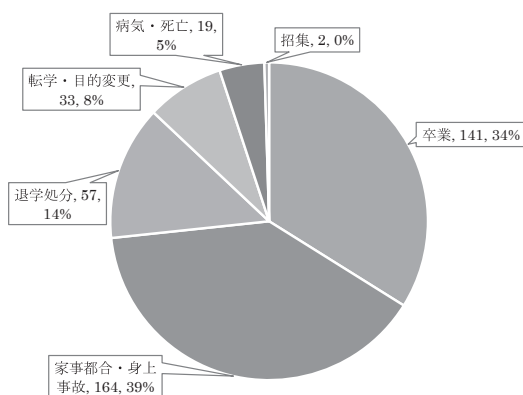
なお、ごく少数ではあるが、年度の途中で降級（2例）、逆の年度途中で進級（1例）、もある。

4月に1年次に入学し、落第や休学せずに課程を終わらせたのは、1898年～1903年の入学者87名のうち19名の22%、現代の高校生のように修業年齢通りに入学・卒業したのはさらに少なく、8名の10%にも満たなかった。

6) 退学理由

前章でみたように退学率が高い時代であったが、退学理由は何だったのだろうか。

グラフ2は、学籍簿に記録のある卒業・退学者416名の内訳である。この内訳をふまえ全国との比較をしてみたい。時代は若干ずれるが、1902～1905年の全国中学校の退学率は18.76%である。⁽³¹⁾ 退学理由別の退学率は、1903年～1905年のデータとして、「退学処分」退学率：2.68%、「家事都合」退学率：12.13%、「病氣・死亡」退学率：2.49%である。⁽³²⁾



グラフ2 卒業・退学理由

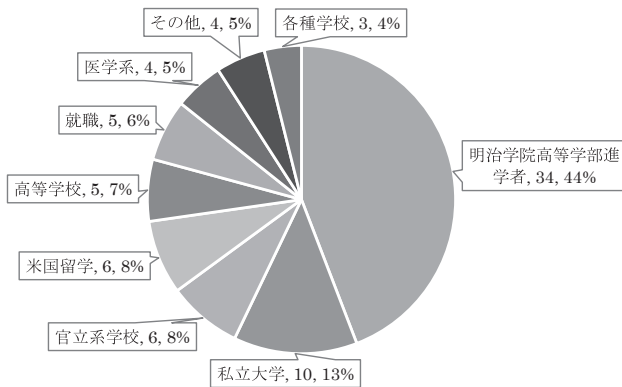
1898～1903年卒退学者のうち学籍簿に記載のある416名

これに対し明治学院普通学部の退学率は65%にもおよび、退学者の方が圧倒的に多い。また退学理由別では、家事都合退学は約3倍、退学処分は7倍にもなる。ちなみに退学処分の内容としては、素行不良などによる退学処分と学費未納による除籍は数例しかなく、ほとんどが長期の無断欠席による除籍である。証言等はみつからなかったので推測でしかないが、正規の中学校ではない故に、学校を移る際のつなぎ的な存在で籍を置きつつさらに移動するのが目的の者が多く、退学率が圧倒的に多くなったのではないだろうか。

7) 卒業後の進路

卒業後の進路は、学籍簿には高等部・神学部への内部進学ぐらいしか記録されていない。個別の著作物からの年譜や、『明治学院高等部・普通学部一覽』などの資料ともあわせてみたい。

尋常中学校から各種学校に戻ったとき、上級学校進学権が剥奪されたデメリットを解消するため、明治学院では高等学部を設置することで卒業生たちの進学先を確保した。そのため半数近くが高等学部に進学し、



グラフ3 卒業生進路

1898～1903年卒業生のうち進路が明確な153名

他の生徒もほとんどが進学している。私立大学は早稲田、慶應義塾への入学者である。また高等学校への進学者もいるが、このうち二人は訓令12号事件のあおりで上級学校への進学権がなかった時代の生徒で（一名は前述の大村）、他の私立中学を卒業後に明治学院へ転学したため高等学校へ進学できた。

さらに比較的多くの卒業生がアメリカ留学を目指した。生方敏郎はこうも書いている。

私たちはアメリカに対して自由の国土、ピルグリムス・ファーザアスの国として、あたかもカナンの楽土の如くに憧憬れていたものだ。学校の卒業生にして洋行する者はほとんど皆アメリカを志し、プリンストンやエールや、シカゴその他、有名な大学を卒業して帰朝すると、いずれも母校を訪れて、私たちにアメリカ文明を讃美して聞かせた。それは実に物質文明ばかりでなく、また精神的文明だった。（中略）学校を卒業したらどこへ行くと云えば、誰も皆アメリカへ行くと即答した。そして月の東から出るのを見て、その空に憬がれながら、友達同士一夜をお互いの未来記を語ることに明かしたこと

が珍しくない。そして実際、卒業生はどんどんアメリカへ渡った。気早な男は、まだ卒業しない内にアメリカへ渡った。月々米国から帰る卒業生と、米国へ行く学生との送迎会のない月はなかった。⁽³³⁾

グラフ3には、6名のアメリカ留学の人数があるだけだが、生方の在学時代、井深梶之助の外遊をはじめアメリカ留学経験がある教員たちも多く、生徒・学生も、普通学部卒業待たずにアメリカに行った者1名、高等学部を中退・もしくは卒業後アメリカに渡った者が少なくとも7名いる。小規模な学校であったから、グラフ3の人数だけでなく高等学部生のアメリカ行きなども含めると、その壮行会はずいぶん回数も多かったと推測でき、生方の表現は大げさでもないことがわかる。特に、訓令12号により上級学校進学権を突然失った1900年3月の卒業生たちは、6名中3名(鈴木春、宗野政彦、横田貞治)がアメリカに渡っている。⁽³⁴⁾ 生徒募集がままならない中、明治学院で修学を続けた生徒たちは、日本国内の進路ではなく、アメリカに未来をみていた例といえよう。

3. 最初の留学生

交通網や情報網の発達、またグローバル社会が成熟した現代では、留学体験は非常に手軽なものになり、白金高校でも例年留学生の派遣も受入も行っているが、1900年前後の明治学院も、アメリカに夢を抱いていた日本人生徒ばかりではなく、海外からの留学生も集った時代であった。

この時代の東アジア圏の中国、台湾、朝鮮半島からの留学生は、特に日本統治下時代の国籍をどのようにみるか、また中等教育および高等教育課程の留学なのか、語学研修程度の短期の修学なのか定義が難しい。ここでは日本語を母語とせず、本来は日本ではない他国域出身で中等教

育課程の学校に概ね1年以上在学した人々を「留学生」とみなす。

紀旭峰は、1895年以降中国や台湾からの内地見学的な来日はあるが、1896年4月に李春生の孫である李延齡ら7名が「私費留学」のはじめであり、「最初の台湾人官費留学生は、明治30(1897)年に東京富士見学校5年生に編入し、のちに農科大学に進学した楊世英であった」という。⁽³⁵⁾

明治学院では、同窓会名簿で留学生をたどると、1887年卒業の朴泳孝がいる。しかし、まだ私塾時代の同窓生であり、どれぐらいの期間学んだのかも不明な部分が多く、「名誉同窓生だった」とも明治末期の留学生だった白南薫が述懐している。⁽³⁶⁾ それより前にも朝鮮半島からの留学生が東京一致英和学校に在籍していた記録もあるが、⁽³⁷⁾ やはり私塾時代でもあるため今回は除外する。

明治学院への留学生について、『明治学院百五十年史』編纂委員の時に筆者は学籍簿調査を行い、その調査結果の名簿を既に公表している。⁽³⁸⁾ この時には、明治学院への留学生は、大半が朝鮮半島・台湾島出身者と、ごく少数の中国大陆出身者に限られていることは判明していた。また、明治学院全体を通しての留学生第1号は、台湾島からやってきた李延禧(1883-1959)であると結論づけた。李延禧は前述の「李春生の孫である李延齡ら7名が『私費留学』」時の一人で、1900年に明治学院普通学部1年次に入學し、5年間で卒業した数少ない人物でもある。

ところが、前回調査した時には未見であった論文や、成績簿も含め、改めて調査し直したところ、李延禧よりも前にいた留学生の存在と、李延禧と同時に普通学部 に在籍した留学生の存在が判明した。

1) 周福全【台湾出身】

今回判明した明治学院第一号の留学生は、台湾島出身の周福全という人物である。ただし、残念ながら明治学院創設以降の1887～1897年の

学籍簿はその存在の有無も含めて不明のため、学院側の資料からは断定できなかった。

そもそも近代以降の台湾からの日本留学は、日本の統治下に入った1895年直後に始まる。早々に日本留学を果たした人物として、「日治不久即有臺籍學生赴日留學，明治28年（1895）12月，臺北大稻埕牧師周耀彩之子周福全赴日就讀明治學院普通科。翌年春，臺北富商李春生隨著首任臺灣總督樺山資紀東遊日本，亦攜子弟數人浩浩蕩蕩到日本讀書，開臺灣富家子弟留日的先河。」⁽³⁹⁾との記述を見つけた。

周福全は、同志社における台湾出身初の留学生・周再賜（1888-1969）の兄である。周再賜は「同志社で育った三人の偉大な教育者」の一人ともいわれ、同志社普通学部、神学部卒業後アメリカに留学し、同志社神学部助教授を経て、群馬県前橋にあった共愛女学校（現共愛学園中学校・高等学校）の校長を務めた人物である。⁽⁴⁰⁾ 彼の日本留学を後押ししたのが、この周福全だといわれている。周福全は伝道者を目指し1895年に細川瀧とともに来日、明治学院普通学部で3年間学んだらしい。⁽⁴¹⁾ 周兄弟の父周歩霞（1846-1923 号は耀彩）は台湾長老派の牧師である点、1895年台湾に日本軍慰問使として訪れていた細川瀧（1857-1934 明治学院神学部卒）によって日本に帰国するとき連れてこられたこと、⁽⁴²⁾ 日本では横浜海岸教会に出入りしていたことなどから、進学先を明治学院に選んだことは十分に考えられる。

彼らが日本へ到着したのは1895年12月の末であることから、おそらく1896年の1月もしくは4月には入学し、1898年3月までには台湾に帰国したと推測する。明治学院普通学部で初めての留学生として学んだが、病となり卒業せずに帰台し、同窓会名簿にのることもなく、また前述の通り学籍簿も行方不明のため、明治学院側からみると埋もれた留学生第1号となってしまったようだ。なお、帰台後1904年台湾総督府医学校（現台湾大学医学部）を卒業し医師となり、周再賜の同志社時代の

学費の支援などもおこなった。⁽⁴³⁾

2) 李延禧【台湾出身】

これまで明治学院普通学部の留学生第一号と思われていたのがこの李延禧（1883-1959）であるが、明治学院を卒業した留学生第一号であることには間違いなく、彼は台湾からアメリカに最初に留学した人物でもある。

李延禧は1896年3月に、「台湾茶の父」ともよばれる大富豪の李春生に連れられて初めて日本の土を踏んだ。李春生は孫の李延禧たちを日本に3年間留学させる目的で来日した。⁽⁴⁴⁾ 奇しくも周福全と李延禧はわずか数ヶ月違いでの初来日であった。

翌々九日、⁽⁴⁵⁾ 彼は孫達少年等を連れて私立「明治学院」に井深梶之助を訪れた。梶之助は井深彦三郎の長兄で、この学院の総理で日本のキリスト教界の領袖でもあったから、李は彦三郎の斡旋でこの学院を少年達の留学先にしようと考え、その件について相談しようとしたものと思われ、学院側もその内諾を与えたようだが、少年達はまだ日本語もわからない状態なので、正式に出来るまでは、どこかしっかりした日本家庭に預かってもらって言葉を覚えさせることが先決問題であった。⁽⁴⁶⁾

井深梶之助との面会には、梶之助の弟・彦三郎の存在もあったろうが、前項の周福全を日本に連れてきた細川瀏が、その同じ時の台湾滞在中台北にも訪問し、李春生等と面会していることを考えると、以前から明治学院の存在は認識していただろう。李延禧の明治学院入学は実際には4年後のことになるが、この時点ではほぼ決定していたこともわかる。

李春生は、東京音楽学校教授の鳥居忱の元に少年達を預け、4月21日に日本を出国し台湾への帰路についた。その後の少年達の足取りは不

明だが、李延禧の場合は、学籍簿および李春生の書簡⁽⁴⁷⁾等から考えると、1896年の4月以降に富士見小学校3年級修了までは通い、その後台湾へもどって公学校を1900年3月に修了、その後すぐに河合亀輔⁽⁴⁸⁾ (1867-1933)の紹介状とともに石原保太郎(1858-1919)保証人として1900年4月、明治学院普通学部入学となったようだ。

李延禧の留学については、当時の新聞にも残されている。

一九〇一年(明治三四年)、大部分の台湾人が近代的な「学校」を知らなかったころ、李延禧は夏休みを過ごすため台湾へ帰省した。記者たちは、彼が通うキリスト教系中学「明治学院」(明治学院高等学校)の様子を詳しく紹介している。⁽⁴⁹⁾そこには英語を教えるイギリス人教師⁽⁵⁰⁾がいて、「クラス分け」があり、さらに成績優秀者には「珍しい賞品」が贈られた。校内には博物館まであり、空を飛ぶものから地に潜るものまで、ないものはなかった。⁽⁵¹⁾

李延禧は17歳で1年次への入学となったが、相当優秀だったようで学年のトップを維持し続けた。彼の生涯については、『明治学院百五十年史』にあるため割愛する。

台湾からの留学生を次に迎えたのは、1906年のことである。呉鴻恩、謝清月、李埤・李森(兄弟)である。彼ら是一緒に来日・入学した。⁽⁵²⁾学籍簿からは入学経緯はわからなかったが、呉鴻恩の父は太平境教会牧師である呉道源で、井深が1903年9月に渡台し面会した時に、息子の明治学院入学を約束したようだ。一次資料は未見であるが、呉道源は台湾で8年制の学校創設を唱え、そのモデル校の一つとして明治学院の名前を挙げたのは、⁽⁵³⁾この井深との面会で明治学院についていろいろ知ったからであろう。⁽⁵⁴⁾

1900年に入って、台湾でも明治学院の名は知られるようになっていたのだ。

3) 韓民濟【朝鮮半島出身】

これまで普通学部への朝鮮半島出身者は、朴泳孝を除くと金鉉軾（1906年3年次入学，1909年卒業）が第一号かと思われていたが，今回成績簿も含めて調査をやり直した結果，「韓民濟」を見つけた。学籍簿を再調査したが，韓民濟の記載はなかったため他の資料との同定が難しいが，断片的な資料をもとにわかる範囲で紹介したい。

韓民濟の普通学部での動向は，成績簿で見る限り，1900年2学期より1年生に在籍するが落第し，1901年度も再び1年生として在籍するも，学年末の成績はやはり赤点で，翌年には成績簿に名前すらない。

「韓国史データベース」⁽⁵⁵⁾によると，1884年12月13日に平安北道義州郡咸遠面西下洞415の出生，1903年に「東京明治学院」を「卒業」し，1907年「大韓醫院附屬醫學校」を出て医者となった人物である。⁽⁵⁶⁾

一体韓民濟はどのようなルートで明治学院に留学をしたのだろうか。直接わかる資料は発見できなかったが，断片的な情報からその骨格は見える。

韓民濟の父親・韓錫晋は，在日大韓基督教会東京教会の設立の時，1909年10月から約3ヶ月間東京に滞在して教会組織を整えた人物である。平壤長老教会神学校を1907年に卒業し，最初に按手を受けた7人の牧師の一人でもあった。⁽⁵⁷⁾つまり，おそらく教会関係で明治学院とつながっていたと考えられる。韓錫晋のもう一人の息子で，韓民濟の弟の韓弼濟（1902年-？）は，1914年6月に京城市内にある「洞徹新中学校」より転校し，1919年明治学院中学部を卒業した。

韓民濟来日の足取りは，当時は朝鮮半島出身者たちの日本政府による行動監視記録から辿ることができた。行動監視記録が，後年の研究に役立つとは皮肉な話である。

「明治33年4月20日」付，兵庫県知事から外務大臣青木周蔵宛の文書で，安泳中，千應聖，韓錫晋，金有聲，韓民濟の来日報告がある。4月

15日に「木曾川丸」にて神戸港に上陸、韓錫晋、金有聲、韓民濟の身分は3人とも学生で、東京または横浜地方での日本語または英語を学ぶための来日と報告。⁽⁵⁸⁾

4月19日には大阪にうつり2日間ほど日本観光、⁽⁵⁹⁾ その後は韓錫晋1人の記録となり、5月29日、30日は一緒に来日した千應聖を神戸から大阪に尋ね、5月31日に「大連丸」で帰国の途につく。⁽⁶⁰⁾ おそらく、4月20日以降、東京または横浜の関東圏にうつり、韓親子は明治学院への入学準備をしたと考えられる。

成績簿においての韓民濟は、1900年の1年次2学期より出現することから、資料の足取りの最後から3ヶ月後のことになる。成績を見る限り英語は及第点でも国語を初めとする日本語で行われた授業はほとんど点数がとれない状態であった。日本語の学習が初歩から始めなければならず、中等教育課程を修めることよりも、日本語と英語の習得を目的とした留学といえるだろう。同年に入学した李延禧の学籍簿は存在するのに、韓の学籍簿が存在しない理由は不明であるが、もしかしたら正規課程の生徒としてより、学院側は「予備的教育」のつもりで預かったのではないかと考えられる。それは、次に来た朝鮮半島からの留学生たちについての記述から類推できる。

韓民濟が学院を去った後、次に朝鮮半島から来た留学生は、1905年のことになる。井深宛の熊野雄七が学院の状況を書き綴った書面に残されていた。

一朝鮮人の来校 五月三日朝鮮国平壤教会よりの紹介にて今度五名の学生来校して入塾せり 全生徒中には日本語に通せるもの一名英語に通せるものもあれど未だ不充分にして全科目を修むるの力がなければ相当級に編入せしむるに能はず目下専ら予備的教育を施しつゝ在り ⁽⁶¹⁾

「東アジア圏留学生名簿⁽⁶²⁾」をみると、1905年に在籍していた留学生は「郭龍周」「朴永魯」の2名である。それから平壤出身の「金鉉軾」は学籍簿上では1906年入学となっているが、成績簿上には1905年から名前が出現しており、「予備的教育」のため成績簿にのみ掲載されていたとも考えられる。いずれにしてもこの3人が熊野の書面にあった5人の誰かに該当するか同定は難しいが、留学を前提に引き受け、相当級への編入が決まるまで予備教育を施すようなシステムがこの頃にはあったようだ。先に述べた韓民済の学籍簿が存在しない理由も、この「予備的教育」に準じたせいかもしれない。また、平壤教会からの紹介で来たことが記されており、教会がパイプ役となっていたことがわかる。

ただ、1年生を2回も留年した韓民済については、教師陣の覚えは相当悪かったようで、上記平壤教会からの学生について記されている傍注で、「皆篤実にして信仰あり韓民済の比にあらず」と記されていた。

4) その他の留学生

生方敏郎が、明治学院の留学生たちの存在を記述していたことは前述したが、彼が在籍した1899年4月から1902年3月の間に学籍簿と成績簿から確認できた留学生は、李延禧と韓民済の2名のみであり、生方の表記する複数人数の留学生とはまだ遠い。そのことがずっと引っかかっていたが、台湾出身者の日本留学関係の資料を集めていく中で、紀旭峰の『大正期台湾人の「日本留学」に関する研究』にヒントを見つけた。紀旭峰は、台湾からの日本への早期留学実現には、教会関係の斡旋が大きく関係しており、その代表的な例が同志社への留学、また意外にも東京盲啞学校への留学が早い段階で実現したのも教会の斡旋だったと指摘する。その具体例として、イギリス長老教会の宣教師キャンベルが、3人の盲人留学生を日本に送り込んだことを挙げる。3人は、バークレー宣教師夫妻とともに1897年8月来日後しばらく横浜海岸教会に滞在、9

月には明治学院寄宿舍にはいった。そして同月東京盲啞学校に入学。つまり教会関係からの斡旋のあった他校在籍の留学生が明治学院寄宿舍にあり、生方の見た留学生には彼らも含まれていたと考えられる。

以上の通り、今回明治学院の留学生について改めて整理したところ、正規の課程に在籍した留学生、「予備的教育」のための留学生、明治学院寄宿舍で生活した他校の留学生の三種類の存在がはっきりした。

5) 各地の教会との連携

周福全の存在が明らかになったことで、明治学院での初めての留学生の受け入れは1900年ではなく、それよりもさらに遡った1986年であることが明らかになった。同じキリスト教系の同志社普通学部での留学生第1号は周再賜の1905年、⁽⁶³⁾ 青山学院での最初の留学生は朝鮮半島出身者の3名が中等科に1906年の入学⁽⁶⁴⁾であることを考えると、明治学院普通学部はそれよりも10年早く留学生を受け入れていたことになる。そしてそのパイプともなったのが、各地の教会（もしくは宣教師・牧師）である。日本軍慰問で渡台した細川瀏の存在は、他のキリスト教系の学校よりも先んじて、台湾と明治学院のつながりを強くしたともいえるだろう。細川が宣教師や教会関係者と精力的に面会し人脈を作ったことが、台湾長老教会と同じ日本の長老派の教会、ひいてはその関係学校から明治学院への留学につながった。朝鮮半島も、平壤教会からの紹介で留学生が派遣されたという記述があったことから教会のつながりは類推できるが、詳細については今後も調査が必要である。

明治学院における留学生は、学院の拡張と全国的な日本留学の隆盛とともに増加し、1906、07年ともに13名ずつ留学生を迎える。やがて大正期に入ると、全生徒の1割は留学生たちに占められるようになる。

4. まとめとして——拡張期に向かって——

筆者は、白金高校において学院史を教える立場に長年いる。学院史の説明でいつも窮するのが、普通学部からの中学高校への流れである。そもそも生徒たちには戦前の学制の基礎知識がない。生徒だけでなく教職員にもいえる。「高校」の前身がなぜ「中学」なのか。その上、「普通学部」である。さらに本校の普通学部創立当時は今の大学教養課程並のレベルを目指していたことや、沿革だけではその中身までわからないことも混乱のもとであった。そのため、生徒たちにもわかりやすいように明治学院普通学部からの変遷を説明できるようしたい、というのがこの数年間の筆者の目標でもあり、今回このような形でまとめることで、その土台を築くことができた。訓令12号や学校経営側の動きについて詳細に書かれていても、生徒には理解しきれない。自分たちと同じ世代がどういう生活をしていたのかを知る方が理解しやすいのである。

さて、改めて今回提示したデータなどから1900年代初頭の明治学院普通学部について、生徒の動向を中心にみてみると、次のようにまとめられる。

- ①社会情勢等に振り回されながらも、私塾体制から近代的学校制度に移行した時期。
- ②信徒またはクリスチャンホームのため入学した生徒と、英語教育を重視して集まった生徒が多い時代。
- ③明治学院における英語教育は、留学可能なレベルの語学教育だけでなく、宣教師の存在や、教師・先輩たちの留学体験による人脈、アメリカ留学の情報ネットワークが構築され、アメリカ留学自体を身近に感じ、そちらに目が向いていた時代。
- ④台湾・朝鮮半島からの留学生は、特に台湾においては日本統治直後に

は日本基督教会による海外伝道により現地と日本とのネットワークが構築され、日本への内地留学先としていち早く明治学院が担った時代。

特に④については、生徒募集がままならず経営難であった点も、もしかしら留学生受け入れにつながったのではないだろうか。授業料等のことというよりは、寄宿舎の定員などで生徒を受け入れる余裕があったからこそ、他校へ通う留学生も宣教師からの紹介であれば引き受けられたのではと推測できる。また台湾と明治学院との関係は比較的容易に追うことができたが、朝鮮半島はまだまだわからないことが多く、今後の課題である。

以上の4点から、総じて、地方伝道などで各地域にいる学院関係の牧師や、各国の宣教師や教会とのネットワークによって明治学院には生徒・学生が集まっていた時代といえるだろう。

この後、上級学校への進学も認められて生徒数も順調に増加し、拡張期へと向かうが、他の私立中学校と同様の中学校として認められ、キリスト教に無関係な生徒も多くなっていくため教育事情はまた変化していく。そのことは改めて検証していきたい。

注

- (1) 生方敏郎『明治大正見聞史』中央公論新社、1978年、115頁
- (2) 井深樫之助とその時代刊行委員会『井深樫之助とその時代』2巻、明治学院、1970年、111、112頁
- (3) 石崎康子・松本智子「解題 山田幸三記『明治二十八年日誌』について」『明治学院歴史資料館資料集 第17集：山田幸三記「明治二十八年日誌」』、明治学院歴史資料館、2021年、10頁
- (4) 秋山繁雄編『井深樫之助宛書簡集』明治学院、1997年、139、140頁
- (5) 日時は秋山繁雄編『井深樫之助宛書簡集』明治学院、1997年所収の「井深樫之助年譜」による。※の行は成績簿によるデータ。

- (6) 井深梶之助とその時代刊行委員会『井深梶之助とその時代』第2巻, 明治学院, 1970年, 527頁
- (7) 鷺山弟三郎『明治学院五十年史』明治学院, 1927年, 298頁によると, 明治38年の新入生数は, 高等科1年21, 2年2, 3年4の計27名, 普通科は記載された人数, 神学部での新入生21名を含めると, 全体で129名の新入生を迎えたことになっている。
- (8) 秋山繁雄編『井深梶之助宛書簡集』明治学院, 1997年, 154頁
- (9) 鷺山弟三郎『明治学院五十年史』明治学院, 1927年, 298, 299頁
- (10) 文部省[編]『学制百年史』, 帝国地方行政学会, 1972年
- (11) 秋山繁雄解説「明治学院『私立学院設置願』」『明治学院百年史資料集』第1集, 明治学院百年史委員会, 1975, 158頁
- (12) 『明治学院高等部・普通学部一覽』自明治35年至明治36年, 22～25頁
- (13) 村井五郎「井深総理と其時代」『明治学院歴史資料館資料集 第02集:『明治学院九十年史』のための回想録』明治学院資料館, 2005年, 94, 95頁
- (14) 落合太郎「余慶」『明治学院歴史資料館資料集 第02集:『明治学院九十年史』のための回想録』明治学院歴史資料館, 2005年, 129, 130頁
- (15) 武石典史『近代東京の私立中学校: 上京と立身出世の社会史』ミネルヴァ書房, 2012年, 161頁。
- (16) 武石典史『近代東京の私立中学校: 上京と立身出世の社会史』ミネルヴァ書房, 2012年, 161, 162頁
- (17) 工藤英一「文部省訓令第十二号関係資料」『明治学院資料集 第2集』明治学院, 1975年, 82頁
- (18) 鈴木限三『白亜校舎の新しきころ』新樹社, 1970年, 271頁
- (19) 鷺山弟三郎『明治学院五十年史』明治学院, 1927年, 283頁
- (20) 松直幹「青年とスポーツと地質学を愛した豪傑(地学者列伝)」『地球科学』61巻4号, 2007, 321頁
- (21) 日本基督教会事務所編『日本基督教会年鑑』昭和10年, 日本基督教会事務所, 1935年, 274頁
- (22) 『明治学院資料集 第2集』明治学院百年史編集委員会 1975年, 104頁
- (23) 『明治学院普通学部学籍簿』および同窓会名簿では「小林良輔」のため, 引用部分以外は「良輔」と表記する。
- (24) 工藤英一解説「富尾留雄(東明)『思ひ出の記-ささやかなる滴すら-』上

- 卷」『明治学院資料集 第2集』明治学院百年史編集委員会 1975年, 109頁
- (25) 文部省訓令第十二号関係資料『明治学院資料集 第2集』, 82頁
- (26) 鈴木春は、明治学院への入学は「キリスト教の信者であるか、ないかの事実が重視されていて」、J.H.バラから受洗した一家ということで無試験になったとあるが(『鈴木春 遺稿と追想』170頁)、たまたま学年的に問題がないことや生徒数が不足していたこともあったと推測する。弟限三の時は、一つ上の学年への転入もあってか有試験であった。
- (27) 工藤英一解説「富尾留雄(東明)『思ひ出の記－ささやかなる滴すら－』上巻」『明治学院資料集 第2集』明治学院百年史編集委員会 1975年, 111頁
- (28) 大村一蔵追憶集刊行会『大村一蔵を偲ぶ』(非売品), 1965年, 9頁
- (29) 「従来、中学部時代から、制服は黒の詰襟に学帽であったが、昭和二十八(一九五三)年度の一年生より新制服に改めることになった。これは『理想教育』による気分一新と、シェーファー博士の提案によるとのことである。中学校では職員会議で討議の結果、背広型、紺のサージでアウト・ポケットの上衣、ズボンは同色でシングル隔帽子はウール、又は綿の紺色登山帽、白のワイシャツにえんじのネクタイ、学年はバッジの色で区別するため、一年赤、二年黄、三年緑、ということに決定した」明治学院『明治学院百年史』1977年, 536頁
- (30) 村井は高等学校受験に失敗し、再び明治学院5年級に戻り、以前の同級生たちより一年遅れの卒業となった。村井五郎「井深総理と其時代」『明治学院歴史資料館資料集 第02集:『明治学院九十年史』のための回想録』明治学院資料館, 2005年, 95頁
- (31) 武石典史『近代東京の私立中学校：上京と立身出世の社会史』ミネルヴァ書房, 2012年, 126頁
- (32) 武石典史『近代東京の私立中学校：上京と立身出世の社会史』ミネルヴァ書房, 2012年, 126, 127頁
- (33) 生方敏郎『明治大正見聞史』中央公論新社, 1978年, 118, 119頁
- (34) 『明治学院高等部・普通学部一覧』自明治35年至明治36年
- (35) 紀旭峰『大正期台湾人の「日本留学」に関する研究』, 2012年, 74頁
- (36) 佐藤飛文記, 白南薫著『私の一生』『明治学院歴史資料館資料集 第08集：朝鮮半島出身留学生から見た日本と明治学院』明治学院歴史資料館, 2011

年, 87頁

- (37) 明治学院『明治学院百年史』明治学院, 1977年, 112, 113頁
- (38) 岡村淑美「東アジア圏留学生名簿」『明治学院歴史資料館資料集 第08集: 朝鮮半島出身留学生から見た日本と明治学院』明治学院歴史資料館, 2011年, 191～202頁
- (39) 「近百年臺灣圖書館發展之研究(1895-1981)以公共圖書館為中心」國立中央大學歷史學系博士學位論文, 林慶弧, 民国103年, 60頁
- (40) 同志社時報103号「同志社人物誌77 周再賜」萩原俊彦, 1997年, 37頁
- (41) 頼永祥『教會史話』第四輯, 人光出版社, 1997年, 125頁
- (42) 細川の自伝『小鱗回顧録』(細川瀏著, 1927年, 173頁)によると, 「不肖の伴ひし青年は当時嘉義の主任伝道者たりし周歩霞氏の次男天祐氏(筆者注: 幼名, ただし台湾での記録は「添佑」)」とあり, また「未だ内地語を解し得ざる者にてあり」と記されている。1895(明治28)年12月19日に基隆港より「仙台丸」で出港, 12月23日広島に帰国, 27日によりやく名古屋の自宅に帰京する。そして休む間もなく, 横浜海岸教会牧師として招かれたため, 年末には横浜に移動した。その間, 天祐は同行していたと思われる。
- (43) 清水安三編集『周再賜先生の生涯』賜千会, 1976年, 21頁
- (44) 佐藤三郎『中国人の見た明治日本』東方書店, 2003年, 93頁
- (45) 1896年3月9日
- (46) 佐藤三郎『中国人の見た明治日本』東方書店, 2003年, 97頁
- (47) 秋山繁雄編『井深梶之助宛書簡集』明治学院, 1997年, 143頁
- (48) 河合亀輔は, 山形県出身, 三田英学校, 青山学院を経て築地大学校, 明治学院普通学部, 1890年に明治学院学部に入學。1894年, 渡米してユニオン神学校やコロンビア大学大学院にて学んだ。1896年5月, 日本基督教会大会伝道局の依頼により渡台。日本人向けの教会として, 李春生等の協力の下, 台北日本基督教会(現在の台灣基督長老教會濟南教會)を設立し初代牧師となった人物である。
- (49) 1901年8月28日付『台湾日日新報』
- (50) 1901年8月28日の『台湾日日新報』によると, この箇所は「英人教師」となっているが, この頃明治学院で教鞭を執っていた外国人教師は, M.N.ワイコフ(1850-1911), H.M.ランディス(1857-1921), J.C.バラ(1842-1920)の3名で, いずれもアメリカ人である。

- (51) チェン・ロウジン著 天野健太郎訳『日本統治時代の台湾』PHP研究所, 2014年, 52頁
- (52) 1906年3月3日付『漢文臺灣日日新報』
- (53) 駒込武『世界史のなかの台湾植民地支配』岩波書店, 2015年, 198～202頁
- (54) 井深梶之助とその時代刊行委員会『井深梶之助とその時代』3巻, 明治学院, 1970年, 34頁
- (55) 「韓国歴史データベース」<http://db.history.go.kr/>
- (56) http://db.history.go.kr/item/level.do?setId=1&itemId=im&synonym=off&chinessChar=on&page=1&pre_page=1&brokerPagingInfo=&position=0&levelId=im_114_00141 「韓民濟」の項 2021年9月5日最終閲覧
- (57) 李清一『在日大韓基督教会宣教100年史1908～2008』かんよう出版, 2015年, 114, 115頁
- (58) 『韓国近代資料集 2』国史編纂委員会, 2001年, 141頁
- (59) 『韓国近代資料集 2』国史編纂委員会, 2001年, 143頁
- (60) 『韓国近代資料集 2』国史編纂委員会, 2001年, 169頁
- (61) 秋山繁雄編『井深梶之助宛書簡集』明治学院, 1997年, 154頁
- (62) 岡村淑美「東アジア圏留学生名簿」『明治学院歴史資料館資料集 第08集: 朝鮮半島出身留学生から見た日本と明治学院』明治学院歴史資料館, 2011年, 191～202頁
- (63) 阪口直樹『戦前同志社の台湾留学生—キリスト教国際主義の源流をたどる』白帝社, 2002年。なお, 学籍簿上では中国籍の「孟提多」が1903年入学生として名があるが, 1904年12月には中退している。
- (64) 佐藤由美「青山学院と戦前の台湾・朝鮮からの留学生」『日本の教育史学』47巻, 2004年, 154頁